

企業の動きが推測できる B/S・P/Lの見方・捉え方

細矢進

株式会社リフレ
代表取締役

まずは、経営者と同じ目線で話をするための貸借対照表・損益計算書の見方を解説する。決算書から企業の動きを推測するポイントを確認しておこう。

STEP 1

調達と運用の関係を理解して B/S・P/Lを一体で捉えよう

決

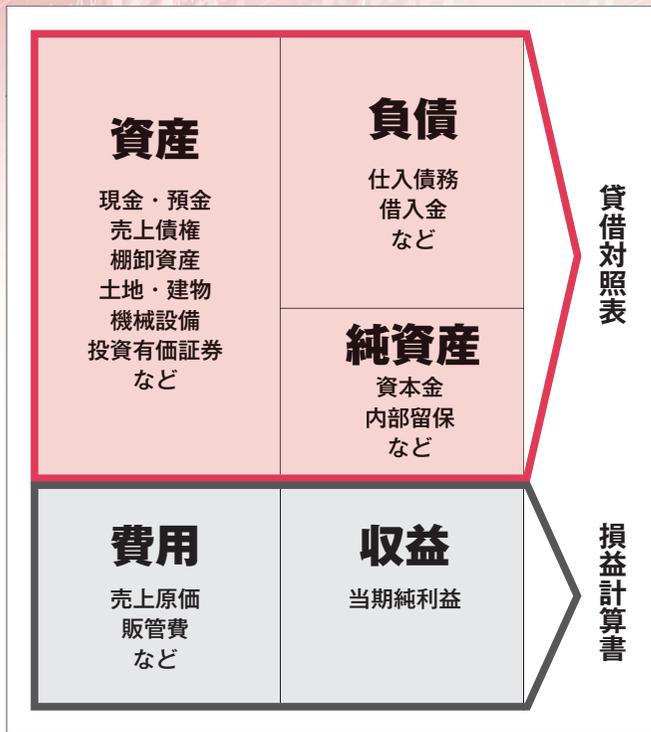
決算書は基本的に、「資産・負債・純資産・収益・費用」という5つのボックスで成り立っている(図表1)。上3つのボックス「資産・負債・純資産」が貸借対照表(B/S)であり、下2つのボックス「費用・収益」が損益計算書(P/L)だ。

算書は基本的に、「資産・負債・純資産・収益・費用」という5つのボックスで成り立っている(図表1)。上3つのボックス「資産・負債・純資産」が貸借対照表(B/S)であり、下2つのボックス「費用・収益」が損益計算書(P/L)だ。

なればならないものである。これに対して「純資産」や「収益」からのお金は、返す必要のない出資や儲けである。経営者は、これらを「面の大きさ」で捉えている。「資産」のボックスがどんどん大きくなって「負債」のボックスが小さくなってくれば、経営的に安心感を持つ。反対に「資産」のボックスが小さくなり「負債」のボックスが大きくなれば、「これはまずいぞ…」と緊張してくるのである。

その増減に悩んだり喜んだりしていることを理解しておこう。
**良い調達・運用が
できているかをチェック**
貸借対照表と損益計算書の関係は、大きな枠組みで考えれば「調達」と「運用」に尽きる。図表2を見て分かるように、企業のすべてのお金は右側の「負債・純資産・収益」から入って(調達されて)きて、調達されたすべてのお金が左側の「資産・費用」で使われて(運用されて)いるからだ。したがって決算書を見るとき

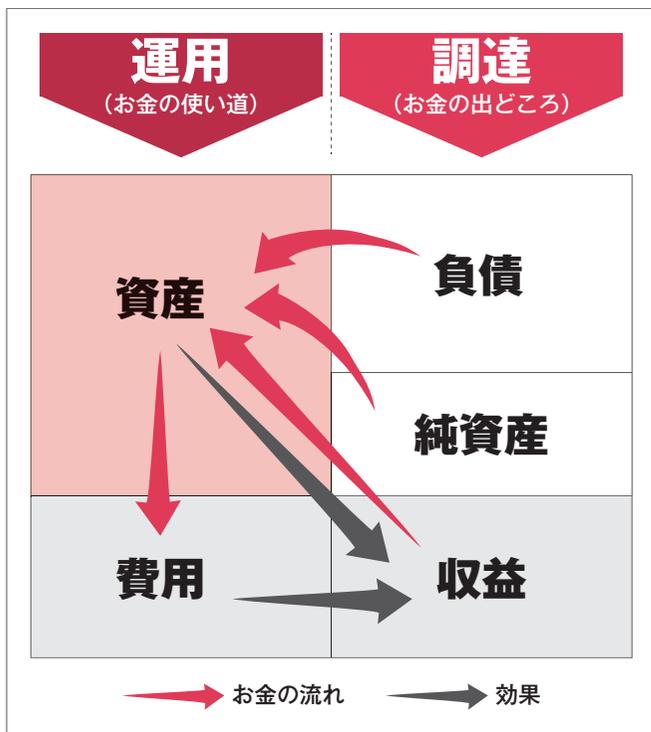
図表1 決算書を構成する5つのボックス



はまず、お金の入り方の特徴を把握して、それが良いか悪いかを評価したり、課題を見つけ出したりする「調達のチェック」が必要となる。

「チェック」を行うことになる。良い運用(＝良い資産の持ち方・良い費用の使い方)をする

図表2 5つのボックスの関係



の純資産の内部留保(利益剰余金)が積み上がっているかを見ればよい。内部留保は、企業の過去の業績の歴史を表す指標であり、企業の余力を表す「ストックの力」といえる。

保」であることが最も理想的である。
**ストックで安全性を
フローで収益性を確認**
ストックの力である内部留保を積み上げていく源泉が、損益計算書だ。効果的な運用の結果として収益が費用を上回ると、最終的に内部留保が積み上がり